



ARGONAUTES

別府大学図書館報

アルゴノートNo.47

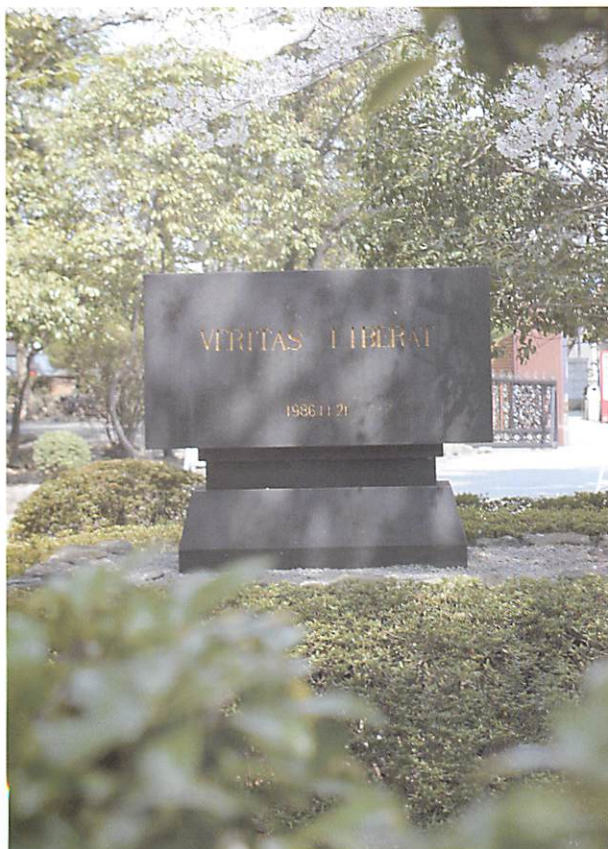
CONTENTS

本たちとともに……………西村 明

西村明先生寄贈図書について

残された本を回収する話…田村 憲美

わが著書を語る……………牧 貴愛



— 西村明文庫所感 —

本たちとともに



西 村 明

はじめに

豊田学長から、今年6月に「西村明文庫目録」を感謝状と共に頂戴しました。しかも、大分名産の素晴らしい竹細工の花挿しも戴きました。私の方こそお礼を申し上げねばならないのに、大変恐縮しました。最近、年を重ねるにつれて本がたまるばかりで、しかも狭い家に住む私のような研究者には本は誠に貴重な宝物ですが、時には大変厄介で、処理に困る代物なのです。この「文庫目録」は、国際経営学部の設置に関わって何かお役に立つことがあればと思っていた時に、経営・会計関係の専門書を必要とされていることを知り、使っただけならばと思い、献本させていただいたもので、文学部の先生方の文庫のように歴史的に残るような書物が含まれているわけではありません。それゆえ、なおさら恐縮した次第です。しかしながら、本当に親切な前石井図書館長、吉岡事務長及び図書館の職員の皆さんがそれらを一冊の目録に纏めてくださったのです。とくに吉岡さんは、分類や書名の意味が不確かな中国語書籍を根気よく、分類し、ラベルを張り付け、利用を容易くし、今まで眠っていた書籍を生き返らせて下さいました。猛暑のこの夏、専門的な分類が難しく、数名の中国留学生に手伝っていただきましたが、2・3日で音を上げました。私も少しお手伝いをしなければと思い、何日か整理を試みましたが、非常に手間のかかる面倒な仕事で、留学生の気持ちがよく分かりました。吉岡さんはなお仕事を続けて下さっています。この小文を読んでくださっている学生諸君には、ついでの折にラーニングcommonsにお出いただき、生き返った書物をご覧くださることを願っています。このような仕事を見続け、目録の一冊目の完成を喜び、贈呈して下さった豊田学長と佐藤図書館長、そしてこの大きな流れを作って下さった日高理事長に心から改めてお礼申し上げる次第です。

この機会にこの献本目録についてなにか書くようにと、佐藤図書館長から依頼を受けたのですが、実のところ「**蔵書」とか「**文庫」というほどのものでもなく、その他の書物と同じように図書館の蔵書の一部と

して取り扱って頂きたいというのが私の希望でしたので、「文庫目録」に包括されている書物について文献上の価値を云々するほどのものでもありませんので、少しこの本たちと私とのつながりを述べさせていただきます。

古書と青年時代

私の学生時代には一般的には学者とか、研究者はまだ社会的に権威があり、その職業に就くことは大変なことでありました。「大変な」ということは知的能力のことだけではなく、経済的な意味でもそうでした。とくに私の場合、経済的なことだけでなく、知的なレベルでも、学者としての職業を選ぶことは大変な冒険でありました。私には、そうした状況を深く考えないで事を起こす無鉄砲なところがあるようです。大学に入学した頃から高度経済成長が始まるとともに、世の中は警職法反対や安保闘争でデモやストライキが日常茶飯事でありました。デモと一緒にした成績の良い学友も卒業する時には一流の企業を目指して就職活動に精を出していました。学生の大方は、研究者のような厄介な仕事よりも、急成長する日本経済に将来の夢を託しておりました。このような時代ですので大学院に進学する人も少なく、それほど競争倍率も高くなく、大学院に入学できました。その後大学教員の職をえて、高度経済成長のお蔭で給与も徐々に上がっていきましたが、もともと文無しから始めた研究者生活であり、それほど自由に欲しい本を買うことはできませんでした。と言っても、妻の目からは、相当自由に買っていたようですが。

その当時、アマゾンのようなインターネット販売もありませんでした。それだけに牧歌的な書物とのつき合いができました。九州に移るまで大阪や京都に住んでいましたが、東京の神田ほどではありませんが、彼方此方に古本屋があり、古本屋回りをするだけでも、楽しい時間を過ごすことができました。高校生の頃ですが、学校からの帰り道に通る、大阪道頓堀の入り口と中ほどに同じ名前の2軒の「天牛書店」があり、ここに高価な専門古

書がずらりと並んでおり、ここに入るだけで何か偉くなったような気がして、なにも買うこともなく2軒の書棚を見ることだけで満足して家路につきました。その後、古本とのつき合いはここから始まりました。

また大学生の頃には、書店（新本）と言えは今日のような大型店舗でなく、小規模ですが、身近なところにあり、どこでも専門書を並べていました。ところが時には、長い間売れなくて、表紙が変色した専門書が高い棚の上でひっそりと並んでいました。店のおじさんに踏み台を借りて、欲しい本を取り出し、店主と交渉しました。「おじさん、これ古本ちゃうか？幾ら？」と、おじさんは一瞬驚いた顔をしますが、「しゃないな、***にまけといたるわ」と価格の2割から3割を引いてくれました。また、欲しいと思っていた「経済学辞典」を別の古書店で定価の半分程度で売っているのを見つけたことがありました。当時の私には定価ではとても買えない代物で、しかも新本同様ですので、喜び勇んで手に取りました。どうもおかしいなあと思いながら、全体をじっくりと見ていきました。なんと中ほどに1枚がきれいに剥ぎ取られているではありませんか。そこで、店の人に、「これは使いものにならんへんで、少しまけてくれへん？」と交渉に入りました。「学生さん、しゃないな。まけといたるわ」と言って、さらに値引きしてくれました。その後、この抜けたページの項目に出くわさないことを願いながらよく使いました。この一冊は欠陥本でもあり、いまま私の書齋の片隅に置かれ、「文庫目録」の中に入れておりません。最近道頓堀に行きましたが、「天牛書店」は見当たらず、専門書もよほど大型店舗に行かないと手

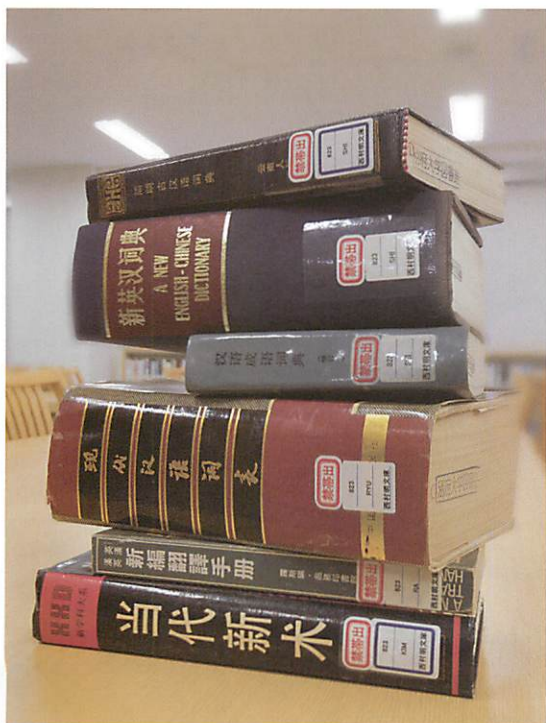
に入らなくなりました。なんとなくさびしくなり、時代の変化を痛感しました。

京都では、四条通りから三条通りにかけて河原町筋の繁華街に老舗の古書店が点在し、書店めぐりも楽しいものでした。しかし、探求欲が疼きだすと、さらに丸太町まで歩き、立命館大学、同志社大学近辺の幾つかの書店を回り、はては百万遍の京都大学まで来ると銀閣寺・北白川の方向と元田中の方向に何軒かの書店があり、値段が相当張りましたが、欲しい本を手に入れることができました。出町柳の近いところに「臨川書店」があり、和洋古書の専門書がずらりと置いてあり、見るだけで楽しいものでした。遠くは、府立大の近くの北大路にも珍しい書物を備えた店があり、散歩ついでに何回か出向き、欲しい本に出くわすと、疲れも忘れ、チンチン電車で鹿ヶ谷の我が家に帰ったことも昨日のように思い出されます。さすが京都では、研究者も多いためか、1960年代には珍しい本を手に入れることができました。

神戸では、三宮の駅を降りて、海の方に向かい、最初の大通りの商店街を少し入ったところに、「後藤書店」という「天牛書店」と肩を並べるような立派な古本屋がありました。九州に勤めるようになってから、学会のついでにそこに久しぶりに立ち寄りしました。そこで、店先になんと中国建国時（1950年代）の全く手に入らない中国語「雑誌」の束を見つけました。私はたまらなく欲しくなり、値段を見ましたが、なんと4万円程しました。当時の給料は10万円を出るかでないかでありましたので、すぐに手は出せません。しかし、いま買わなければ誰かに買われるような気になり、書店を出たり、入ったりして、長い時間考え抜きました。もちろん子供を抱えた妻の顔も浮かびました。そして、書店に入り、再度じっくりと雑誌を一冊一冊見ていく内に、驚いたことに大学で教わった先生の蔵書印が押されているページが目に入りました。もう私の心は決まりました。それほど大きなお金を持ち合わせていないし、店の人と交渉し、本を大学に送ってくれるように頼み、大学が買うような格好でお願いし、後程代金を送り、個人的に買ってしまいました。私は決して気前の好い人間とは思いませんが、書物になるとなにかに取りつかれたような癖があるようで、貧乏人でありながら、厄介な性格であります。

また、九州に移転してからは、千代町の角に「山内書店」という古本屋があり、今にも棚から崩れ落ちそうな書物の山から、本の名前を言うと、どこからともなく取り出してくれる店主には驚かされました。今から考えれば、今の私よりも若い店主であったと思うのですが、貫録があり、指導教官にもものを尋ねているような感じでした。

以上のように、私の書庫には、稀覯本というような高価で、貴重な書物はありませんが、私の足と執着心で集めた青春時代の思い出が籠っています。恐らく「文庫」というほどのものではなく、本たちもクスクスと笑って



いると思いますが、一人の研究者が自分の専門に合わせて足で集めた本棚として見ていただければ、有り難いというほかありません。

中国関係の文献について

中国関係の文献・雑誌については、中国の文化大革命期を研究する人には恐らく役立つものであると確信しています。1950年代から80年代までの経済関係を中心として哲学・自然科学・階級闘争の関連の書物からなっています。これらの書物はもちろん私の研究と結びついていたのですが、特に1980年以前には毛沢東思想を中心とする社会主義論が支配的であり、すべての書物の内容が画一的であるように見えます。しかしながら、今から考えれば、旧ソ連の道とは異なる「新しい社会」を創造しようとする中国の葛藤が浮かび上がってくるのです。もちろんそこには権力欲・特権指向というものが存在していたかもしれませんが、国全体としての貧困と貧困の平均化のなかでそれはあまり姿を出さず、マルクス・レーニン・毛沢東の思想のもとにきれいに包み込まれていました。豊かになる道と共産主義の理想を追求する路線、つまり生きることと理想との葛藤が透けて見えてくるのです。1949年の「新中国」から文化大革命終結までの20数年は、現代、或いはこれからの中国の姿を考えると、極めて貴重な歴史的な実験であり、マルクス主義のあり様、そしてその実現の困難性から人間というものを見つめ直す貴重な歴史であります。この時代に焦点を当てている、ここに集められた「文庫」の内容は、いま中国では殆ど問題にされていませんが、いつの日か必ず賛否を超えて取り上げられるでしょう。

これらの書物も先の古本と同様安価なものばかりであります。とくに当時の中国では書物は紙質も印刷も悪く、全く安価でした。私の好みに合致していました。しかしながら、よほど意識的で情熱を持たないと、書物は簡単に手に入る代物ではありませんでした。まず日本の読者が少ないし、中国側も日本と国交がなく、北京週報などの宣伝誌以外は輸出する意味も感じていなく、会計や経

営の書物に至ってははいよいよ手に入りませんでした。まず専門的な経営が確立していないし、その方法について議論することもなく、もっぱらマルクスやレーニン、毛沢東思想に依拠し、精々帳面のつけ方と計算方法などの教科書だけが書店に並んでいました。しかしながら、これらも実は大変な資料であり、人間が生き、生産・消費という経済活動がある限り経営と会計が存在せざるを得ないのであり、単純な、無内容に見える書物から当時の経済の姿がほんやりと見えてきます。

北京では、王府井通りの入り口、北京飯店のすぐ出たところに、大きな「新華書店」（当時書店はすべて国営でこの名前であった）があり、最新の専門書も手に入れることができました。この通りを更に行くとして外国書を取り扱う「外文書店」があり、新華書店にないものを買うことができましたが、当時国際交流も盛んでなかった関係で、外国語の専門書はほとんどなく、政治的なものばかりでした。統計類はそれを専門として扱う書店に行かねばならず、店を探すのに苦労しました。こうして集められた書物は、幸い北京飯店の中に郵便局があり、そこから日本に何回も送りました。また、地方に行くときは「新華書店」があり、地方では売れ残った専門的な教科書や地方でのみ出版された書物を手に入れることができました。

中国東北部にある遼寧大学に滞在した時のことですが、ある日仕事に疲れ、散歩に出かけたところ、図書館に近い運動場の片隅に沢山の書物が放り出されてあり、本の虫干しでもしているのかと思います。そこで書物を物色している学生に尋ねてみますと、図書館が「不要」になった本を処分しているので、欲しいものがあれば持って帰ってよいと教えてくれました。私は早速血眼になって探しましたが、中国語訳の初本『資本論』とその他数冊を手に入れましたが、収穫はそれほどではありませんでした。それにしても、学生が殆どいないので、『学生は本には関心が無いのかね?』と先の学生に問うてみると、彼は「これはもう数日前から行われており、いい本はなくなっている」と応えてくれました。この数冊少々部屋で勉強しすぎ、外に出なかったことを大変悔みしました。勉強もほどほどにしなければと、大きな宝物を失うこともあると、『資本論』を脇に抱えて、トボトボと宿舎に帰りました。

30年勤めた大学を退官する時もこれら中国関係の書物は一冊も捨てることなく、また古本屋に見せもしませんでした。私は、これらをまとめて大切に扱ってくれる研究機関を探しておりました。幸いこの度別府大学図書館に引き取っていただき、心から感謝しています。その姿だけでは、ただの安っぽい、紙切れにしか見えませんが、そこには時代の息吹と当時の歴史的な実験への私の思いが込められています。

紙幅の関係でお喋りもこのあたりで止めますが、いま



残念に思うことは、人生と同様、今のことがそれ以前に分かっていれば、本たちともっといい友達になれたことです。九州大学を退官する時に研究室の書物をすべて家に持ち帰れば、生活の場が無くなるので、半分近くを処分してしまいました。幸いこの度残りの半分はこのような立派な「文庫目録」として生き残ったのですが、あとの半分はどこに行ったのか、寂しい限りです。若い時ほど将来の長い期間を見据えて生きる重要性を、取り返しのつかないことですが、今頃になり、この本たちに教えられています。

(国際経営学部 国際経営学科 教授)



西村明先生寄贈図書について

吉岡 義信

国際経営学部設立にあたり、西村明先生より図書が寄贈された。2008年2月より登録作業を行いその第一段階として『西村明文庫目録』(2012.5.31 現在)を作成した。この目録には日本語 2,529 冊、中国語 1,453 冊、英語 225 冊、ドイツ語 66 冊、韓国語 2 冊の計 4,275 冊が収録されている。内容的には先生のご専門である経済、経営関係の図書が大部分を占めているが分野的には多岐にわたっている。引き続き目録作業を行い2012年12月末現在で新たに中国語 3,136 冊、日本語 21 冊、英語 7 冊の計 3,164 冊が登録された。これ以外にNACSISに所蔵が無く新規に目録を作成しなければならない中国語の図書が約 300 冊程残っており、2013年より新規作成作業を順次行なっている。

日本語図書では、シリーズものとして経済学者・思想家であり日本のマルクス主義経済学の開拓者である『河上肇全集』(岩波書店)、『金日成著作集』(未来社)、『レーニン選集』(大月書店)、『毛沢東選集』(日本共産党中央委員会出版部、外文出版社、三一書房の3種)がある。唯物弁証法、史的唯物論、中国現代史関係、マルクス、レーニン、毛沢東など社会主義、共産主義関係、中国現代政治、批林批孔関係、中国共産党関係では『中国共産党資料集』(勁草書房)も所蔵されている。

経済関係では、経済学一般、経済思想、マルクスの「資本論」関係、中国経済関係、国際経済、企業経営、経営

管理関係では特に財務管理、財務会計・会計学が圧倒的に多数を占めている。その他農業経営、貿易関係のものも目立つ。

蔵書の中で一番多いのが中国語図書で、『全国報刊索引・哲社版』は1987年から1998年の間がほぼ揃っている。唯物弁証法、中国現代史など思想、歴史関係も多く、毛沢東、周恩來の伝記に関するものもある。『毛沢東選集』(人民出版社)、『毛沢東集』(北望社)、『列宁選集』(人民出版社)、『列宁全集』(人民出版社)、『馬克思恩格斯選集』(人民出版社)などの他、社会主義、共産主義思想関係が目立つ。中国現代政治、中国共産党関係では文化大革命時期のものも多く、経済関係では、当然ながら日本語図書と同様の分野にわたっており、財務管理、財務会計・会計学が多い。また工業経済、農業経営関係も多くある。特殊なものとして目を引いたものとして『満鉄史資料』(中華書局)はNACSISに登録されているものは全て揃っている。また多段ロケット理論に関する図書もある。

洋書は数も少なく、ほとんどが経済関係で財務管理、財務会計・会計学が中心である。

これらの内容から、国際経営学部の学生に限らず、他学科、特に史学・文化財学科の学生にとっても貴重な資料が揃っており大いに活用してもらいたい。

(附属図書館事務長)

残された本を回収する話



田村 憲美

この二・三年の間に、老齢の母と父が相次いで亡くなったので、大阪市近郊の家を整理することになった。最後は遺品整理の業者さんに依頼するのだが、その前に自分たちでできるだけことはしておかなければならない。重要なもの—もちろん色々あるだろう、記念品や重要書類とか、あれば有価証券とか現金とか—を事前に取りのけておいた方がいい。私はその作業に取り掛かった。

この家は、私が小学校に入学する前後に父親が建てたもので、両親はこの家に半世紀も住んで、二人とも亡くなる直前まで、とにかくこの家で暮らすことができた。私は大学進学のために、東京に住まいを移したけれども、それでも夏休みや年末年始、春休みは大阪で過ごしたもので、大学院に進学した後も前期博士課程（修士課程）ころまではそうしていた。70年代にはいまよりも大学の休業期間がずっと長かったから、20代の半ばまではまだ一年のうち、ことによると4か月くらいはこの家に一応いたわけである。

とはいえ、大学の課題レポートなどは、口うるさい母親を避けて大阪の府立中之島図書館やハンバーガー・チェーン店の二階席で書いたこともあるし、大学院の修士論文のための史料調査や現地調査にも出かけた。空いた時間は大阪を歩き回った。

大阪は、概して東京よりも古本がやすいところなので、私は古本屋めぐりをして小遣いで刊行された史料や専門の論文集を買い、もちろん楽しむのために読む文庫本や新書・選書の新刊書類も買った。それらの本はこの家の小学生時代からの「子ども部屋」（三畳とちょっと）に高校・予備校以前の本と一緒に置かれた。本のごく一部は、東京の六畳（風呂・トイレ・炊事場共同）の下宿アパートに持ち帰ったけれども、多くはそのままとなった。下宿にも本や論文のコピーの束が、文字通り山積みになっていたからである。

息子がいつか大阪に戻ってくることを期待して、両親は何年も「子ども部屋」を維持していたのだが、息子は意に沿わず、そのうち、両親が弱るにつれて「子ども部屋」は季節の衣料品や未開封の贈答品などが置かれる一

種の物置・納戸となった。部屋の中に足を踏み入れるのが難しくなり（端的にいうと不可能になり）、一年に二・三度大阪の家に両親を訪うときにも、気になりながら面倒の気持ちが先にたち、「時間もないな」などと放置することになった。母親の、次いで父親の具合が悪くなったこの数年間は、この家を訪ねる機会はずっと増えたものの、もちろんこの部屋に入るどころではなくなった。去年の6月、私は重要なものを選び分ける作業に取り掛かった。書類や貴重品を選び分け、両親の衣料品のうち基準に合うものを海外に衣料品を援助するNPOに送り、あるいはゴミに出して、物置と化した「子ども部屋」も足の踏み場ができるようになった。遺品整理業者に依頼する前に、自分の本を回収しなければならない。私は長袖シャツと軍手とマスクで装備を整えた。

本は、三畳の部屋の本棚（三つと天井付近の作り付二つ）、机の下、床に平積みになって積層していた。床に近いところに積まれていた本は湿気を帯びていた。壁際の本はゴキブリの糞でよごれていた。あまり触れたくない状況である。

とりあえず刊行史料類から埃・汚れを落として箱詰し、それから雑多な本に取り掛かる。

中央公論社の『日本の歴史』シリーズ。これは私が中学生だった1960年代後半に出たもので、流行には乗り



遅れない父親がそろえたもの（90年前後によく東京の資源ごみの日に出されていたものだ）。いまでも読む価値がある。梅棹忠夫『文明の生態史観』（1973年21版）、ビニールカバーつき、ハードカバー。加藤英俊の本と一緒に並んでいた。『西錦司著作集』箱入り・ハードカバー。生態学・社会学・文化人類学の戦後の「京都学派」に憧れていたのだ。『桂米朝落語全集』（創元社）箱入り。一卷欠けている。大阪・梅田の大型書店で一冊ずつ買ったので、漏らしてしまったのを思い出した。政治思想史の丸山真男のあの著名な著作（東京大学出版会）は、生まれて初めて買った専門書。大学2年だかの私には歯が立たず、そのまま積読となったわけである。東京大学出版会の刊行物で二冊目に買った本は、3年次に東京で購入した松本新八郎の『中世社会の研究』だった。五来重の『増補 高野聖』（1975年、初版、ソフト・カバー）は読んだ記憶が鮮明で、どこにいったのだろうかと思っていた本。最近、文庫になった。これで民俗学的な仏教史に関心が出て、部屋の中には五来重の著作がほかにも何冊もあった。

ほとんどの文庫本には書店のカバーを付けたままになっていた。当時その方が恰好がよいと思っていたのだが、タイトルがわからず整理するには不便である。私は軍手で汚れを払いながら、カバーを外してゴミ袋に捨てていった。

思いがけない角川文庫版『今昔物語集』全4冊（佐藤謙三校注、1974・75年）。東京で必要になって、別に一セッ

ト揃えてしまった。これは私見では、索引と注が付いていて利用と通読にはもっとも便利な本である。同じく角川文庫版『太平記』（二）（1982年一刷）。『太平記』（一）は手元にあって、持っているはずの（二）を探していたのだが、どうしてここにあるのだ。だいぶ日に焼けてしまっている。

講談社文庫版『平家物語』上下（高橋貞一校注、1972年一刷）。これは生まれて初めて通読した日本の古典文学。この本はカバーのデザインや版面が美しいので、通読できたのかもしれない。書店のカバーのおかげで、まだそれほど汚れていない。

多くの本のカバーは梅田辺りの大型書店のものだったけれども、この『平家物語』は家の近所の商店街の書店のそれが掛けてあった。ベストセラーだった小松左京の『日本沈没』上下（光文社、1973年）もそこで買ったのがわかる。この書店はまだある。都心への乗換駅にあった書店でも結構多くの歴史や民俗の本を買っている。去年閉店して、コンビニエンス・ストアになってしまったのを見つけた時には衝撃だった。

作業は延々と続いて、8月を経、10月に一段落して、この家から送り出した本は段ボール箱で30箱以上になった。ほんとうはまだ本は残されているのだけれども、田辺聖子や司馬遼太郎らとはもうお別れしてもいいような気がする。

（文学部 史学・文化財学科 教授）

偶感

教養としての読書のために

佐藤 瑠 威

人が本を読む理由は色々あるだろうが、大多数の人にとっては趣味の一つとして愛好されている。大学教員にとっては読書は単なる趣味にとどまらず仕事として、すなわち研究のために行われる。学生にとっては大学における勉学のために必要なものと考えられているだろう。

しかし、読書は趣味と研究や勉強のためだけではなく、教養のために行うことによってさらに重要で豊かな意味を持つことになると思う。ここで教養というのは哲学者ヘーゲルがいう精神の陶冶、精神形成という意味である。教養という言葉の通常の意味と異なり、ここでは知識を

得るためではなく、意識的に自己の精神、人間性を形成していく過程のことである。文学書や哲学書を読む意味はここでいう教養を身につけるためにある。（ニッチェを趣味や知識を得るために読む人はいないだろう。）とりわけ学生時代には、読書は勉強と趣味のためだけではなく、偉大な著者の作品を通して精神形成という意味での教養を身につけるためになされるべきものではないだろうか。古臭い教養主義ときこえるかもしれないが。

（文学部 国際言語・文化学科 教授／図書館長）



わが著書を語る

『タイの教師教育改革 — 現職者のエンパワメント —』

広島大学出版会
2012年3月31日発行
214頁



牧 貴 愛

タイでは、曜日ごとに色が決まっている。月曜から黄、桃、緑、橙、青、紫、赤の順である。ゆえに、タイ人の多くは、生まれた日の曜日の色をラッキーカラーとしていたり、曜日の色の服を身にまとったりする。本書の装訂は橙色、すなわち木曜日を意味している。なぜ、橙色＝木曜日なのか。答えは単純明快、本書の主題である教師と関係の深い曜日だからである。もちろん、本書の表紙と裏表紙の2枚の写真も教師に関係がある。とくに、表紙の写真は、日本でいうところの師範学校を前身とする「地域総合大学」に開設された「教員養成博物館」の展示であり、「貝葉」に記された経典が口伝されている様子を示したものである。この写真からは、タイにおける教師は仏僧であったことや、「学級」における組織的な教授学習が行われていなかったことなどを読み取ることができる。このような事実を教育学的な言葉を用いて表現するならば、タイにおける教師像は「聖職者としての教師」であり、教育の方法は「教師中心主義的な教授学習過程」であったということである。さて、これら2つのキーワードを手がかりに本書の内容について語ってみよう。

「教師中心主義的な教授学習過程」——1999年、タイでは、日本の「教育基本法」に相当する「国家教育法」が制定され、今日なお続く教育改革の火蓋が切られた。「国家教育法」に基づく教育改革では、先ほど触れた教師中心主義的な教授学習過程から学習者中心主義的な教授学習過程への転換を図る「学習改革」が中核的な改革施策として位置づけられている。「学習改革」の他にも改革しない領域はないと言ってよいほど改革施策は多岐にわたっている。そうした改革施策のうち、本書で論じたのは、日本の小学校教諭、中学校教諭、高等学校教諭に相当する初等中等教員の質を向上させるための種々の改革施策、すなわち教師教育改革についてである。タイの教育改革の全体像、教師教育改革の位置づけについては、本書の序論ならびに第1章において論じている。

「聖職者としての教師」——この言葉から連想されるように、タイにおいて教師は尊い存在である。タイでは、公立私立を問わず、すべての教育段階の教師に対して敬

意を表すための記念日が年に2回、公的に定められている。とりわけ、入学式が終って間もない5月下旬から6月の木曜日に行われる「ワイ・クルー（教師拝礼）」の儀式は、教師と児童・生徒、学生とのヒエラルキー的関係を明確にするという重要な役割を担っている。他方、本書で論じているように、タイでは「専門職としての教師」像を前面に打ち出した改革が進められている。タイの教師教育改革において「聖職者としての教師」と「専門職としての教師」という2つの教師像はいかなる関係にあるのか。タイの教員にはどのような資質・能力ないし力量が求められているのか。このような疑問については、本書の第2章、第3章において論じている。

本書の第4章、第5章、第6章および結論では、「専門職としての教師」を理念として講じられている種々の施策の意義と課題について、現職教員への聞き取り調査や観察調査から得られた知見を交えながら論じている。各章で論じている改革施策のコンセプトは、近年、日本においても導入・定着が図られているものであり注目に値する。と同時に、昨今の教員免許更新制や教職大学院に見られるように他国の改革施策がそのまま自国の改革に役立つとは考えにくい、と著者は考えている。著者が専門とする比較教育学は、既存の問題領域の完登を目指す「登山家」ではなく、前人未踏の「測量点」を拓く「冒険家」であらねばならぬと「あとがき」に記した所以である。

著者は、平成24年度から、タイにおける「教職高度化」をめざした教師教育改革に関する研究（科学研究費補助金（若手研究（B））というテーマの下、タイの教員養成制度と教育専門職免許状の更新制度についての学習・研究を進めている。この研究成果を取り纏めることができれば、タイの教師教育改革に関する研究が一段落する。その暁には、新たな「測量点」を拓く旅に出たい。

著者紹介

牧 貴愛 (MAKI Takayoshi)
別府大学文学部（教職課程）・講師
『アルゴノート』と『同い年』